

河崎 茂 前理事長 略歴・主要業績

学歴・学術歴等

昭和 17 年 9 月	大阪高等医学専門学校（現・大阪医科大学）卒業
昭和 17 年 10 月	医師免許証第 103629 号を以て医籍登録
昭和 28 年 7 月	京都大学より医学博士の称号を受ける 主論文「抗生物質と細菌とに関する実験的研究」
昭和 29 年 7 月	大阪医科大学神経精神病学教室入局研究員
昭和 37 年 11 月	精神衛生鑑定医に指定される（昭和 63 年 7 月より精神保健指定医）
平成 6 年 5 月	韓国慶尚綜合病院医学交流提携
平成 7 年 10 月	中国医科大学名誉教授
平成 10 年 2 月	天津市安定医院との医学交流提携

事業歴等

昭和 23 年 10 月	河崎病院開設院長
昭和 34 年 8 月	精神科、神経科水間病院開設院長
昭和 34 年 12 月	医療法人河崎会理事長 医療法人河崎会水間病院院長
昭和 51 年 4 月	医療法人河崎会附属准看護学院開校
昭和 52 年 4 月	医療法人河崎会附属医療高等専修学校長
昭和 59 年 3 月	精神科デイケア新設
昭和 59 年 4 月	医療法人河崎会看護専門学校長
昭和 62 年 6 月	医療法人河崎会老人保健施設希望ヶ丘開設施設長
平成 4 年 12 月	社会福祉法人建仁会理事長
平成 5 年 8 月	社会福祉法人建仁会水間ヶ丘開設
平成 7 年 11 月	精神障害者グループホーム水間開設
平成 9 年 4 月	学校法人河崎学園河崎医療技術専門学校理事長 学校法人河崎学園河崎医療技術専門学校開校
平成 17 年 12 月	学校法人河崎学園大阪河崎リハビリテーション大学理事長
平成 18 年 4 月	学校法人河崎学園大阪河崎リハビリテーション大学開校

団体歴等

昭和 49 年 4 月	貝塚市医師会会長（昭和 55 年 3 月まで）
昭和 51 年 4 月	大阪府私立病院協会会長（昭和 55 年 3 月まで）
昭和 55 年 4 月	社団法人大阪府病院協会会長（昭和 63 年 3 月まで）
昭和 55 年 4 月	社団法人日本精神病院協会副会長（昭和 63 年 3 月まで）
昭和 55 年 4 月	社団法人大阪府私立病院協会名誉会長
昭和 57 年 4 月	日本医師会代議員（平成 14 年 3 月まで）

昭和 63 年 4 月	社団法人日本精神病院協会会長（平成 11 年 3 月まで）
昭和 63 年 4 月	社団法人日本精神病院協会政治連盟委員長（平成 11 年 3 月まで）
昭和 63 年 4 月	社団法人大阪精神病院協会名誉会長
昭和 63 年 4 月	社団法人大阪府病院協会名誉会長
平成元年 4 月	大阪府老人保健施設連絡協議会会長
平成元年 12 月	社団法人全国老人保健施設協会監事
平成 11 年 2 月	近畿リハビリテーション学校協議会会長
平成 11 年 4 月	社団法人日本精神衛生連盟理事長
平成 11 年 4 月	日本精神科病院協会名誉会長
平成 13 年 4 月	全国老人保健施設連盟委員長

官公庁関係等

昭和 18 年 6 月	軍務応召（ビルマ方面軍兵站部隊軍医）
昭和 21 年 7 月	応召解除復員
昭和 46 年 11 月	大阪府医療機関整備審議会委員（昭和 61 年 8 月まで）
昭和 47 年 10 月	大阪府精神衛生審議会委員（昭和 63 年 7 月より大阪府精神保健審議会委員）
昭和 51 年 9 月	大阪府衛生対策審議会専門委員
昭和 55 年 4 月	大阪市医療審議会委員（昭和 63 年 5 月まで）
昭和 60 年 2 月	大阪府社会保険医療協議会委員
昭和 61 年 9 月	大阪府医療審議会委員（昭和 63 年 4 月まで）
昭和 62 年 11 月	厚生省痴呆性老人対策専門家会議委員
昭和 62 年 11 月	厚生省公衆衛生審議会行動制限等に関する専門委員会委員（昭和 63 年 10 月まで）
昭和 63 年 10 月	厚生省公衆衛生審議会精神衛生部会専門委員（平成 11 年まで）

海外視察歴

昭和 37 年 8 月	北欧三国等の精神衛生視察実情調査(オスロ、ストックホルム、コペンハーゲン) 及び各精神病院の視察並びに医学会参加 その他 19 回 27 ヶ国を歴訪
-------------	--

叙勲 表彰等

昭和 20 年 5 月	叙正八位
昭和 51 年 5 月	大阪府知事表彰（公衆衛生功労）
昭和 51 年 11 月	厚生大臣表彰（健康保険五十周年記念）
昭和 52 年 5 月	厚生大臣表彰（公衆衛生事業功労）
昭和 54 年 11 月	藍綬褒章受章（保健衛生功労）
平成 2 年 4 月	勲三等旭日中綬章受章
平成 23 年 9 月	叙正五位

学校法人河崎学園創設者 河崎茂初代理事長を偲んで

学校法人河崎学園 理事長
河崎 建人

平成23年9月16日、本学園の創設者であり初代理事長であった河崎茂先生が93年間の生涯の幕を閉じられた。理事長室と事務局に飾られた慈愛に満ちた微笑みを浮かべておられる遺影を見るたびに、元気でいらした頃のお姿が脳裏に甦り、懐かしさとともに耐え難い寂しさが込み上げてくる。

今こうして初代理事長を偲ぶ文章を書いているとさまざまな出来事やエピソードが思い起こされてくる。私にとっては父として、先輩医療人として、そして生涯の師としての大きな存在であったが、やはり平成3年以降水間病院で20年間にわたり机を並べての理事長と院長としての関係性が最も印象深く思い出されてくる。互いに競うように早朝より病院に出勤し、私の方が早い時は「今日は早いこのう・・・」と笑顔を浮かべながら、あの独特の歩き方でいつものカバンを持っての出勤が毎朝の日課であった。職員が出勤してくるまでの1時間余りが二人だけの会話の時間であった。この時間の中で多くのことや方針、方向性が決っていったように思われる。河崎医療技術専門学校を大学に発展的に改組したいとの考えも確かこの早朝の会話の中で話されたように記憶している。そして一度考えが示されるとその実現に向けて全力で取り組むのが常であった。普段は多くの事柄に慎重に対応することが多かったが、自分で決めたことに対しては「何かに憑かれたように・・・」と言っても過言ではないような情熱を傾けられた。

そして常にその想いの実現に向けてサポートをしていただける多くの職員や関係者に恵まれていたことが、初代理事長の一番の幸せであったように思われる。戦争体験や医療人としての長い経験から「人の和」の大切さをいつも口にされ、「石垣を組むには同じ形の石だけでは出来ない。丸い石も四角の石も必要だ」と例えながら個性ある人達の必要性和それらを束ねるリーダーシップの重要性を唱えておられた。人の器としての大きさが多くの優秀な人材を引き寄せ、夢の実現に向けて力を結集させたのであろう。

本学の1号館ロビーに高野山管長揮毫の建学の精神である「夢」と「大慈大悲」の額が掲げられている。初代理事長が大学設置を決意し、それまでの人生と大学設置の想いを高野山管長に話した時にいただいた言葉である。本学で学ぶ学生だけではなく、この水間の地で教育・医療・福祉に携わる全ての関係者が常に「夢」と「希望」を持ちながら、病める方たちに全人的なアプローチを実践してほしいとの願いが込められている。

我々残されたものとしてこの建学の精神を引き継ぎ、初代理事長の理念をより具現化することを改めて誓い、偲ぶ言葉としたい。

輝く巨星墮つ！！

大阪河崎リハビリテーション大学 学長
上好昭孝

平成23年9月16日大阪河崎リハビリテーション大学の創設者である初代理事長河崎 茂先生の突然の訃報に接し、わが耳を疑い驚愕し、先生との出会いから今日に至るまで充実した7年余りのことが走馬灯のように脳裡を駆けめぐり全身の力が抜け暫し呆然自失であったことを思い出します。

【大学設立までの道のり】

先生は大正7年貝塚市西葛城村で生を受けられ、大正、昭和、平成にわたり先生の“人生哲学”を貫かれての享年93歳でありました。既に幼少時から神童との噂高く、中学時代から医学の道を心ざされ、太平洋戦争の真っ只中の昭和18年大阪医専を卒業後、地元水間駅前に念願の河崎医院を開院されて間もなく、軍医として戦地に赴かれた。終戦後帰国され、一旦中止されていた河崎医院で地域医療に専念されております。

その後病院にし、医療分野を広げ、当時敗戦によるアルコール中毒や覚醒剤に蝕まれた多くの精神病患者も受け入れられる精神科病院として、水間病院を開設されております。

その頃から患者中心の医療を行うにはコメディカルとして看護職などの充実も必要と考え、准看護師を養成する男女共学の准看護学院を昭和51年に設置されております。

特筆すべきは昭和63年に先生が日精協会会長に就任され、平成12年に辞められるまでの長期にわたり精神病患者のため尽くされた功績は目を見張るものがあります。

現在水間病院を中心に、河崎病院、リハビリテーションセンターなど1000床以上を持ち、男女共学の看護専門学校も併設され、地域医療、医療人育成のための実習・教育などに精魂を傾けられてきました。理学療法士、作業療法士養成の専門学校を平成9年に設立されております。その後医療人には医療技術だけでなく高い教養も必要と考え、ここで集大成として専門分野だけでなく、医療人としての教養教育も行なえる大阪河崎リハビリテーション大学を平成18年開学されました。

先生の日頃の生活信条、人生哲学は付図に示した先生の著書の題になっている常に休むことなく、一步一步前進あるのみで苦勞を苦勞とも思わない終わりのない（楽しい）闘いを表わした「人生は楽しい闘い」に表わされております。

【建学精神：“夢”と“大慈大悲”】

先生は医者として長い道のりの到達点としての自己の使命として、これからの医療人を育成できる大学教育に取り組みたいとの思いで、高野山金剛峰寺座主大僧正資延敏雄（すけのぶびんゆう）管長を訪ねられ、自身の生き様と考えを伝え、自分に合った「建学の精神」を表わす言葉を頂きたいとお願いされ授けられたのが、「夢」と「大慈大悲」でありました。まさしく自分の思いを伝える言葉だと感銘され、大学の玄関に“扁額”として掲示されております。

常に夢と希望を持った、仁の心（思いやりの心、いたわりの心）を備え、自分だけの立場で考えるのではなく、相手の立場に立って物事を考える医療人になってほしいとの先生の願が込められており

ます。

【泉州水間の和光同人！！】

先生は常に物事を真剣に前向きに考える、大正生まれの人たち共通の気質の持ち主でありました。他人まかせではなく、自分が「出来ることは自分でやる」という気迫があり、奉仕精神が強く、いわゆる「減私奉公」の精神の持ち主でありました。

今日の悪しき風潮である自己主張の強い、自己中心的な私利私欲におぼれがちな人々とは違って、奥深い味わいのあるいぶし銀のような人でありました。

まさに先生は常に前向きに努力し、自身の高い見識や才知を表に顕わさず、行動される老子のいう「和光」そのものであり、地域での医療・教育のなかで常に実践するという同塵の人でもあり、先生こそまさに“和光同人”そのものでありました。

【先生との出会い】

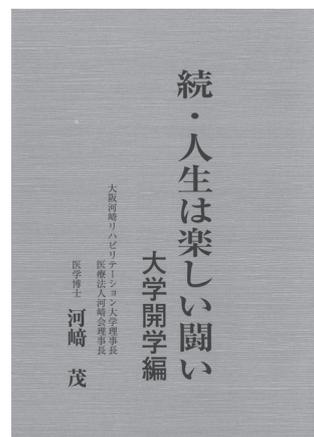
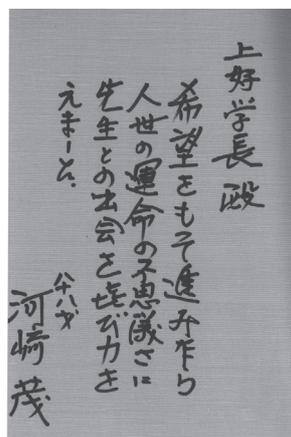
平成15年和医大リハ科に小生が奉職中、教授室にリハビリ大学設立のため、全国の医科大学でリハビリ医学を担当・教育しているヒトを探しているのと訪ねてこられたのが先生とお会いした一等最初でありました。

そのとき先生は生い立ちから、母体である水間病院、河崎病院、リハビリセンターをはじめ看護専門学校、医療技術専門学校まで設置し、地域医療とともに医療人養成など実践されていることを話され、強い信念、人生哲学を持たれた方だと感嘆させられたこと今も覚えております。21世紀を見据えた人間性豊かな医療人の育成には、4年生大学にして人間教育として教養教育にも力を注ぎたいので小生に協力してほしいと熱い胸のうちをお聞かせいただき、先生の生き様、大学設立への強い信念と意欲・卓識に触れると共に、人間的な魅力に引き付けられお受けすることになった次第です。

先生から贈呈された先生の人生哲学である著書（付図）「人生は楽しい闘い」の見返しに直筆で書かれた先生の小生への暖かい言葉を今も座右において大切にしております。

今では先生の生活信条、人生哲学を教職員一同よく理解し、心から敬服し先生の遺志を継ぎ、一人でも多く建学の精神である「夢」と「大慈大悲」を持った医療人を育成するよう、大学をさらに発展させるよう努力してまいります。

どうぞ、ご安心ください。



「人生は楽しい闘い 五」を遺稿として

大阪河崎リハビリテーション大学 副学長
寺 山 久美子

河崎理事長先生とは、私が日本作業療法士協会会長であった頃に当時日本精神科病院協会会長であった先生から作業療法に関する様々な心強いご指導をいただいた経緯があります。本学の前身河崎医療技術専門学校の平成9年の開設に際しても「精神科に強い作業療法士を養成したい」と強い意欲で語られ、またその後「リハの専門大学にしたいので是非手伝って欲しい」と高い志で教員人材確保に奔走され、東京にもたびたびお越しになりリハ関係の多くの人々と意見交換をされておりました。私は本学が初の卒業生を出す節目にあたる平成21年度に先生から本学への就任を要請された経過があります。就任に際し理事長先生からは特に ① 受験生、殊に作業療法学専攻の入学希望者が増えない。関西地域ではこの傾向が顕著であるので何とかしたい。② 精神障害、認知症、園芸療法を河崎グループで臨床・教育・研究の共通課題としたい。これらは作業療法が特に活躍してもらいたい分野であるが、現状は不満である。③ 大学が落ち着いたら大学院を開設しリハのリーダー的人材を養成したい、との課題とミッションを頂きました。以来2年半当大学に在職し、先生の提示された課題とミッションの実現に教職員と共に心を合わせて取り組んでまいりました。「大学の形はできつつあるが、大学院設立を含め、未だ道半ば」という現状であり、これら取り組みの成果は今後期待されている所です。今年2011年我が国は東日本大震災・福島原発大事故に遭遇し、戦後最大といっても過言ではない「国難の年」となりました。一方で大学は開学6年目を迎え、日本高等教育評価機構より初の認証評価を受ける「重要な年」にあたります。これからが本大学の本番です。「小なりともオンリーワンの個性ある大学づくり」を学生、教職員、保護者、関連施設、実習施設、卒業生、地域の人々等の「チーム力」で築いていかななくてはなりません。

そのような重要なこの時期、敬愛して止まない巨人河崎茂先生は9月16日、永眠されました。折しも刊行された「人生は楽しい闘い五」は先生の遺稿となりました。「河崎茂イズム～夢・大慈・大悲・愛・人生は楽しい闘い」に溢れた本書は、今後の私ども大学関係者にとっての「バイブル」となりましょう。また学生・保護者の皆様にも読んで頂き、「建学の精神、河崎イズム」を伝承して参ります。先生に1つご報告しておきたいことは、「認証評価準備作業を通して、大学の形がより明確になり、また教職員の絆がより緊密になってきた」ことです。嬉しいことです。

先生、本当にありがとうございました。今後の大学の成長をずっとずっとお見守りくださいませ。

リハビリ専門職業人教育への熱き想いを偲ぶ

学校法人河崎学園 特別顧問
山 本 博 之

今は亡き前理事長河崎茂先生の在りし日をお偲びし、先生のリハビリテーション専門職業人の大学教育にかける青年のように熱い想いを反芻し、今、私たち本学関係者は、より良い教育を目指して一層精進しなければならない、との気持ちを新たにしているところです。

先の大戦で大学での研究生活から軍医として出征された先生は、名にし負う南方の戦地で過酷な体験をされ、幾多の困難を乗り越えられ、極限状態にある人の心の有り様について天国から地獄まで見てこられたと思います。これが先生の人間愛の源流の一つかと思います。先生はまた、並外れの強靱な精神力と体力の持ち主であると共に強運の人でもあったと思います。

戦後は幅広く活発な医療活動や医師会活動を行い、さらには地域社会活動にも積極的に参加され、また日本精神病院協会会長として日本の精神科医療の充実、発展を図り、これを世界レベルに引き上げるための多大のご功績を残されました。先生は実践活動を通して、我が国の保健・医療・福祉の現状を的確に把握し、その将来を展望されました。

地域の求める医療、福祉ニーズに応えることこそが我が使命とお考えになった先生の医療、福祉活動は、将に地域に合った、地域に密着した、地域に信頼され愛される医療、福祉活動そのものでありました。このような理念のもと長年にわたる精神科医療と高齢者ケアの歩みの中から、先生は医療やケアにおいてリハビリテーションは殊のほか重要であり、その専門職業人の教育は、大学教育による高度で専門的な高等教育が必要であるとお考えになりました。

医療や福祉サービスが、真にこれを受ける人びとの幸せに繋がるものであるためには、これらの担い手である医師、看護師、保健師、リハビリテーション療法士など多職種の連携が不可欠であり、種々の専門職が互いに理解し合い協働するためには共通の言語が必須です。それは、人体の構造や機能、人の心や健康に関する知識や技能、論理的・科学的思考力などであり、これらの修得には教養教育を含む大学教育が必要とお考えであったかと思います。

精神科医療、認知症ケア、そして子どもたちの育成に力を注ぎ、子どもたちにとっても高齢者にとっても夢と希望が持てる未来をつくっていききたい、これが先生の“こころ”であったかと思います。医は知と技と人より成るとされますが、先生は人間教育を重視され、“夢”“大慈大悲”を本学の建学の精神とされています。

本学が、地域に生き、地域に信頼され愛され、世界に羽ばたく大学として、教育、研究、地域貢献力をさらに充実、発展させ、地域との絆を強める大学、そのような大学を目指すことをお誓い申し上げます、先生のご冥福をこころからお祈り申し上げます。 合掌

出会い、そして悲しい別れ

大阪河崎リハビリテーション大学 事務局長
轟 木 長 紘

あれは、新緑の頃であっただろうか、某者の紹介で河崎 茂先生に初めて会ったのは、文部科学省の中の、と或る部屋であった。(ここでは喫茶室としておこう。)先生のこれまでの功績については後に知ることとなるのだが、威風堂々とした中にも礼儀正しく、そして優しく語られる姿に、望んで頂けるのであればお役に立ちたいと、即刻決意するとともに着任の日を大安の日と定め、別れたことを昨日のこのように思い出す。そして7年の歳月が流れ、悲しい別れを迎えることとなった。

着任してみると大学の設立準備はまだこれからというところであったが、3専攻の学術団体である全国組織の会長を客員教授にお迎えをすることや関連大学の調査、地元貝塚市の「開発関係課長会議」への概要説明や諸課題についての意見聴取など、設置計画を進める条件は整っていた。これらのことから先生の偉大さと人望による強力な支援体制が伺えた。

1年程経った頃、お供して高野山管長の資延敏雄大僧正に会いに行くこととなった。金剛峰寺に案内され、通されたのは真然大徳(弘法大師の甥)の廟を背後に頂く管長応接室であった。廟の解説を伺った後、まず先生から、軍医として戦争に出征された経験やその後の実体験を通じて精神科医を目指したこと、そして医療系の大学設置への思いに至った経緯を語られた。もと陸軍士官学校卒で戦争体験を経て仏道に入られた管長は、甚く感心され、話は長時間にわたって続いた。そして後日「夢」と「大慈大悲」の書を賜り、これが建学の精神となったことは言うまでもない。

先生は日常の業務の場で、しばしばことわざで表現されることが多かった。それを私は何時しか書き留めることとしたのだが、横に並べてみると諺と思っていたその多くが、先生の瞬時の創作によるものであることに気付いた。例えば、行政庁の調査・監査・指導について「自分の首は、自分ではよう締めん」と、実地調査や監査は時々あった方が、より良く改善される動機付けとなるということらしく、大学においても各種審査や履行状況調査、特に認証評価を受けて痛感させられることとなった。また、時には私自身にも向けられた、事務体制を確たるものとするため、レベルの高い組織づくり目指そうとする私に、「大阪城の石垣を見なさい」と、石垣は、大きい石、小さい石、四角い石、丸い石、尖った石など、いろんな石で成り立ち、城を支えているとのことである。成程であるが、尖った石には未だに困ったものである。その後河崎先生語録集として記録したが、中断を余儀なくされ、また、一部個人に関わる内容も含んでいるため、引出しに眠ったままとなっている。

このように先生は、瞬時に人の心の動きを読み取るなど、諸課題について先見の目を持ち合わせていらっしやう。その点が大学運営に多くの点で生かされ、今の大学を良い方向に導いていると思う。改めて、河崎先生の偉大さに頭の下がる場所であるが、先生の大学創設への思いに心を致し、与えられた期間を微力ながら全力で当たる所存であります。

永年に亘るご指導ご鞭撻に改めて感謝申し上げますとともに、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

河崎 茂 先生を偲んで

大阪河崎リハビリテーション大学
学生部長（前理学療法学専攻長）
富 樫 誠 二

私が、河崎 茂先生に初めてお会いしたのは、大学が開学する1年半ぐらい前のことだったと思います。その当時、広島大学の教授で、平素から敬愛する恩師でもある奈良 勲先生から大阪に大学ができるので、教員にならないかとお誘いがあり、河崎 茂先生のことを知りました。その後、二度ほど奈良先生とご一緒に河崎 茂先生と広島でお会いしました。お会いして感じたことは、人生に対する情熱を強くお持ちで、人間に対する温かさでした。そして、大学の一員になることを決めました。

大阪に来て、おそば近くで接しながら「人生は楽しい闘い」だという先生ご自身の著書に書かれているように、人生を楽しみながら、目標に向かって強く、逞しく人生を歩まれるお姿を拝見いたしました。佐竹作業療法学専攻長と朝がけて水間病院やご自宅に伺い、そのたびにいつも温かく迎えていただきお話したことを懐かしく思い出します。

先生は、建学の精神である「大慈大悲」が啓示するような情けあるところの広い人でした。ときどき、リハビリテーション医療について、いろいろとご相談いたしました。いつでもそれに的確に答えていただきPT協会活動を支援してくださいました。そういった経緯の中で私も同席させていただき、大阪リーガロイヤルホテルで半田PT協会長と楽しく鼎談したことが懐かしく思い出されます。

まだまだやりたいことがあったのではとご推察いたしますが、先生、彼岸でゆっくりとお休みなさってください。そして、学生や教職員をお見守りください。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

熱き想いにこころ魅かれて

大阪河崎リハビリテーション大学
作業療法学専攻長
佐 竹 勝

この度のご逝去に心よりご冥福をお祈り申し上げます。

河崎 茂先生とは短い期間のお付き合いでしたが、私にとっては大変中身の濃い、生涯忘れられない充実した6年間であったと思い起こしております。作業療法士の大学教育に参画して欲しいとの要請を受けたのは名古屋マリオットアソシアでした。遠くより時間をかけて足を運んでいただきましたことしっかりと憶えております。当時の私には教育に足を向ける気持ちはありませんでした。しっかりとした口調と優しい眼差しからみなぎる教育への信念、作業療法士の養成に対する気迫に胸熱くなるものを感じ、こころ動かされたことを憶えております。作業療法士を愛して下さっている方が尋ね来られ、今日の前にいらっしゃることに元気をいただいたことが昨日のように思えます。

大学入職してからも、先生の教育への情熱や思いは変わることなく、呼ばれてはよくお話しさせていただきましたこと、今もって忘れ難く、お教えはしっかりと守っていきます。安らかに眠り下さい。人の気持ちを思いやれるこころ優しい作業療法士を育成すること、園芸療法の発展に寄与することをここに誓いし、追悼の言葉とさせていただきます。

ことばの力

大阪河崎リハビリテーション大学
付属図書館長（前言語聴覚学専攻長）
矢 守 麻 奈

「えらい田舎でびっくりしたでしょう」8年ほど前、水間病院5階会議室で河崎茂前理事長に初めてお目にかかった折に伺った第一声です。つられて窓の外を見れば確かに、屋上庭園の向こうに山並みと広い空が見えました。間際までぎっしりと住宅が建て込んだ14階建ての病院に勤務していた身には、1時間で繁華街に出られる上に自然に恵まれた環境の中で、学生と共に学びあう生活を思い、新たな希望と意欲が湧いたのを昨日のこのように思い出します。

その後も折にふれ優しい時には厳しい、印象的なお言葉を伺いました。「自分が今の地位に就くまでに他人から意地悪されたと思っている者ほど他人につらく当るんや」「この調子でうまくいくと思っていたけどそうはいかない。世間でそんなもんかも」公式のスピーチでなく、ふとしたつぶやきから先生のご経験やお人柄の一端を拝察できるようでした。厳しいお言葉の後でも、難しい問題の中でも、なぜかしら心が和み、時にはニヤリとさせられました。戒めを受けながらも心底では「先生は私たちのことを理解してくださる」と感じました。学生や後輩に注意を促す際、先生の真似をしようとしてもできるものではなく、また真似できる人も見たことがありません。

先生の最晩年にはリハビリをご一緒させていただきました。とても困難な状況にも拘らず、お部屋に伺うと常にご自分からリハビリを始められました。うまく決まった時には「フッフ」と微笑し、なかなかうまくいかない時には「難儀やな」と眉をさげるなど表情豊かに。決して諦めない、途中で投げ出さない先生は、これまでお目にかかった数千人の患者様の中にも類を見ない方でした。最後まで身を以て、一番大切なことを教えてくださったのです。

もう新しいお言葉を伺えない寂しさは拭えませんが、今後は「言語聴覚療法はこれからや。だんだん広まって注目されるようになる」という先生のお言葉を力に、私たちも諦めず、投げ出さず、言語聴覚療法の普及と振興に取り組んで参ります。

河崎茂理事長に接して

大阪河崎リハビリテーション大学
入試・教育センター長
小西正良

故河崎茂理事長に哀悼の意を表します。初めて理事長にお会いしたのは、平成15年10月、水間病院の相談室のことでした。私の履歴書を見ながら専門学校を4年制大学へ移行したいと、熱い計画を話されました。以来、準備室の仕事に携わるなかで、幾多の教えやお叱りを受けました。認可申請の書類を整えていくうちに関係者の意識の違いにやきもきしていた時期がありました。あの巨石を積み上げたことで有名な大阪城の石垣は、同じ大きさの石は一つもない。大きな石の間に小さな石をうまく挟み込んでやらないと堅城にならない、と。個人の能力や想いは違うことを認識することが組織をうまくまとめる秘訣である、と。それを見極めてうまく用いる器量を身に着けることよ、のう。大学開学後、大学の理事長も兼務され水間病院から大学に足を運ばれる。いつもと異なるデザインのシャツを着こなして若々しい恰好で玄関に車から降り立った。本宅への帰りの際、耳元で「先生、素敵なシャツですね。いやあ、そうか。これは孫のプレゼントよおと、にこやかな好々爺の笑顔がいつまでも臉に焼きついています。胸ポケットにはディズニーのボールペン。家族を大切にされるホッとする時間でした。ご冥福をお祈りします。

夢多き河崎茂先生を偲んで

大阪河崎リハビリテーション大学
精神科リハビリテーション研究センター長
大田喜一郎

河崎先生と約5年前、山本特別顧問と一緒に大学の理事長室で初めてお会いしました。先生は無邪気な笑顔して、人の心を惹きつけ、人の考えも聞いて下さる方である印象を受けました。大学にお世話になり、その後は頻繁にお会いし、先生からご指示、私からの相談など機会が多くなりました。しかし、先生については十分に理解できませんでした。先生の著書から知識を得ました。先生の業績は膨大であり、一人の人では為し得ないお仕事を拝読すると筆舌に尽くし難く、正に、昭和、平成の怪物(A monster of a man)であると実感しました。大学の校庭には、大和の心(慈愛)を表す灯籠、西洋の心(キリスト的愛)満ちた彫刻(バイオリンを奏れる愛に富んだ美女)を玄関の正面に静置。これは心情(慈愛)を表す気持ちであるとのこと。先生は慈愛に満ちた心根の優しい学生に育てることを希望していました。先生は学問に対しても、真摯に取り組み、常に先生とお会いすると大学院を作るんや、大学院の設立に向っているんや頑張っやとおっしゃっていました。残念無念。先生のご遺志を成就致しますのでお守り下さい。 合掌

(大田喜一郎教授は平成23年12月29日ご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。)

祖父 河崎茂を偲んで

社会医療法人慈薫会河崎病院院長
河崎 敦

平成23年9月16日、祖父河崎茂が享年93歳で他界しました。最後は住み慣れた自宅で、家族に囲まれての大往生でした。数年前から体調を崩し、病と闘いつつも日に日に衰弱していく姿を親族としてまた治療に携わる者として見続けて来ただけに、臨終の際は自ずから胸の内を手を合わせ、“お疲れ様でした”と語りかけていました。

河崎茂という人物に対し人それぞれ違った印象をお持ちでしょうが、私は、“みんなに幸せになってほしい”という慈悲の塊のような人物であったように思います。その“慈悲”が単に欲求をかなえてあげるといった浅薄なものではなく、人格的に進歩向上してほしいという本当の意味での“慈悲”であるがゆえに、時には仏のようにやさしく時には鬼のように恐ろしく映っていたのではないのでしょうか。とりわけ医療、福祉に対する“慈悲”には並々ならぬものがあり、つい2～3年前まで“これからの日本の医療、福祉はどないするんな！”と情熱的に語り、先々のことを憂いていたことが思い起こされます。

その“慈悲”の結晶の一つである大阪河崎リハビリテーション大学が平成18年に開学しました。開学式を迎えて間もないころ祖父の自宅で二人になった際“大学一期生が卒業する時俺は生きておるかな？”と突然切り出され、“そんな大丈夫に決まってるやん”となんとか作り笑いを浮かべながら答えました。傍目に見て祖父は肉体的に相当衰えていましたが、卒業生が社会に出て活躍するのを心待ちにしている気持ちがひしひしと伝わってきましたので、なんとしても生きて大学一期生が卒業し巣立っていく場面に立ち会って欲しかったですし希望がかなったことは何よりの喜びでありました。

今や河崎茂は鬼籍に入りましたが必ず冥府より現世の様子を気にかけて見ていると思います。大阪河崎リハビリテーション大学から多くの人間性豊かな医療人が輩出し、医療福祉分野で貢献することが何よりの手向けになると確信しています。

精神科医療で作業療法は欠かせないよ！

医療法人河崎会水間病院
リハビリテーションセンター長 作業療法士
衣川 満 哉

にっこり微笑んで、「シェンシェーのお好きなように」。水間病院に就職するときの面接で「先生、この病院の作業療法をどのように進められるご予定でしょうか」と御聞きした時の前理事長先生のお答えであった。昭和63年の事である。この年に認知症高齢者専用の老人保健施設「希望ヶ丘」が開設され、作業療法活動も始まった。併せて水間病院の作業療法室の開設準備も進めた。当時はまだ作業療法士の数が少なかったが、前理事長先生は積極的に人材を採用してくださり、作業療法室の充実にお力添え下さった。平成9年に河崎医療技術専門学校が開校し、3年後から順次卒業生が採用されて現在の陣容になってきた。この間、前理事長先生は「認知症を含め、これからの精神科医療には作業療法が欠かせない」と作業療法士にとって力強い味方になってくださった。ここまで作業療法室が充実してきたのも前理事長先生のお力添えのたまものである。お元気ならばもう一度お尋ねしたかった。「先生、これから先の作業療法室はどのような形になっていくのが良いのでしょうか」と。どんな答えが頂けたのだろうか。 合掌

教えと励まし

医療法人河崎会水間病院
リハビリテーションセンター理学療法室室長
沖田 幸治

人として誠実に生きること
人を想い義理を欠かないこと
学び理解し伝えること
家族を守り大切にすること
愛すること
仕事を真面目にひとつずつ確かに仕上げていくこと
労をねぎらい共に分かち合うこと
社会に貢献すること
日本国民であることを自覚すること
先祖を敬うこと
感謝すること
恥を知ること
王道を歩むこと
物を粗末にしないこと
美味しく食べること

自然を畏れ敬うこと
手当をすること
命を守ること

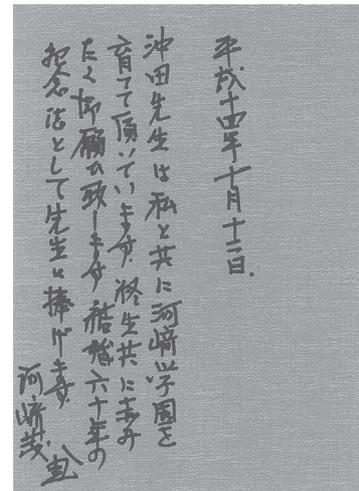
河崎茂先生からの教えと励ましは言葉では言い尽くせません。

人との関わり方、仕事への取り組み方、人生の生き方そして社会への貢献の仕方のすべてでありました。

人生の楽しい闘い方の全てであり、教訓でありました。

心から感謝を込めて、ご冥福をお祈り申し上げます。

合掌



河崎茂先生を偲ぶ

社会福祉法人建仁会 事務長
山 野 勇

私と前理事長河崎 茂先生との出会いは今から約7年前の平成17年3月である。

今の職場（建仁会）に再就職するにあたって先生の面接を受けた。これが最初であった。以来、先生にお仕えした期間は6年半と短かったが、強く印象に残っていることがある。勤め始めて半年くらい経ったある日、先生から、「これから先、特養はどうなっていくと思うか、君の考えをレポートにして出してくれ」と指示を受けた。その時まで日々の業務処理が中心で、「特養の将来…」といったことについて正面切って考えたことがなかった。急遽、関連資料を集めそれを基に何とか私見を取りまとめ、提出した。そのレポートの出来について、先生の感想を直接お聞きすることはなかったが、後日人づてに「理事長が『良くできてる』と言うてた」と聞き及び、胸をなでおろしたものである。今から思えば、その時は大変だったがそんな機会を与えて下さったことに感謝している。先生は、医療、介護、教育等各分野の施設を擁する河崎会グループのトップとして生涯その発展に心血を注がれた。いつときも現状に甘んじることなく、常に時代の流れを読み、新たな事業を構想されるそのパワーには驚かされた。ただただ感服するばかりで私などとても足元にも及ばない。体調を崩されてからはお目にかかる機会もなく、先生は93歳の天寿を全うされた。その生涯は順風満帆の如くであったが、その陰には、私など凡人の窺い知ることのできない苦悩やグループ発展に向けた絶えざる努力があったことは想像に難くない。今は、先生のご冥福をお祈りするのみである。

河崎茂先生を偲んで

河泉会 前会長（河崎医療技術専門学校理学療法学科2期生）
神戸大学医学部附属病院リハビリテーション部
山口 良 太

「リハビリテーション業界はいつまで今の状態にいるつもりなんだ。時代が変わっているのだから、業界もどんどん変わらなければならない。変わらないのなら君たちが変えていきなさい。」私が河泉会会長に就任して初めてご挨拶にお伺いしたときも、ご生前最後にお会いした時も全く同じことを、熱く問いかけてくださった河崎茂先生。大きな遺影を見ながら手を合わせても、ずっとそのように語りかけてくださっているように思います。

在りし日の河崎茂先生はいつお会いしても熱くじっくりとお話をされ、そして私のような若輩者の意見でも食い入るようにお聞きされる方で、常に全力投球されていました。その熱い眼差しの先には、我々一人一人だけではなく常にリハビリテーション医療業界全体を見ておられたのだと思います。

河崎茂先生、残念ながらご存命のうちに理想の社会を完成することはできなかったかもしれませんが、先生のご遺志を受け継いだ我々の世代が、いつの日か先生が理想とされていた社会に近づけるように精進してまいりますので、どうか安心して見守っててください。

河崎茂先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。